

曹洞宗総合研究センター報

Soto Institute for Buddhist Studies

Zen and Contemporary Studies Department.

Zen Studies Department.

Soto Education Department.

2016-2017

INDEX

研究活動報告

研修活動報告

第18回学術大会開催報告

平成28年度事業報告

在籍者紹介

曹洞宗総合研究センター報(2016年度版)の刊行にあたって



曹洞宗総合研究センター所長 大谷哲夫

平成 28 (2016) 年度の曹洞宗総合研究センターの在籍者は役職員・講師・研究員・研究生・研修生を含めて 71 名になります。研究員・研究生・研修生には優秀な人材を擁し、将来の宗門を担う人材養成に長年取り組み、制度的にも従来に増して整備され、その体制は他宗門のそれに比して決して劣るものではありません。

かつて車の両輪に例えられた、「宗研」と「教研」は、いまやその区分を明確に分断できなくなっております。それは現代の時勢に沿った教学確立の困難さを意味すると共に、当センターのありようの難しさを表しています。ともすると宗旨参究の原点から離れ、安易に汎仏教的に流れやすい面があるからです。私の尤も希うところは、真摯なる各所員の宗旨に基づく信念の確立と当センターが本来の使命を見失うことなく、宗門のために発展することです。

平成 28 年度は第 18 回学術大会において「只管打坐とマインドフルネスとの対話～一仏両祖が目指した坐禅とは～」、『梅花流指導必携』の源流～梅花は曹洞宗教義にどう位置づけられてきたのか～、と題して 2 つのシンポジウムを開催いたしました。

昨今グーグル・インテルなどでも取り入れられ、禅的心理学の分野で世界的に注目を集めている自己管理、ストレス軽減法としてマインドフルネスがあります。日本国内でも、近年の禅ブームに相まって、関心が非常に高まっていると言えます。

ストレス軽減法としてのマインドフルネスはもとより只管打坐とは異なりますが、このような状況に鑑み、マインドフルネスやヴィパッサナー瞑想を学び確認しつつ、道元禅師・瑩山禅師が求め目指した禅とはどのような教えであったのか、またその教えを、現代社会において我々宗侶はどの様に取り組んでいくべきか、只管打坐を標榜する我が宗門の坐禅をどの様に伝えていくべきかについて協議検討いたしました。

また、道元禅師 700 回大遠忌の年に産声をあげた梅花流詠讃歌は、宗門に於いては初めての詠讃歌活動による布教運動。これをどのように教義から意味づけ、また歌詞によって教義を敷衍していったのか、先達の足跡を学び、その課題を考察いたしました。

リレー発表としては教化研修部門研究生が、「瑩山撰・峨山編と伝える『報恩録』考究」と題して、研究の成果を発表いたしました。

当センターでは、宗門の僧侶、宗教者としてそれらの問題にどのように関わるかということ念頭におき、日々研鑽に励んでおります。この冊子を通して、その一端をごらんいただければと思います。今後とも社会の要請に即応し得る宗旨の参究・研修体制を堅持するよう研鑽を積んで参りますので、皆様方のご理解とご支援をお願い申し上げます。

2017 (平成 29) 年 8 月吉日

研究活動報告

「こころの問題」研究プロジェクト

プロジェクトの趣旨・目的

現代社会がかかえるさまざまな社会問題は、その多くが「こころの問題」に起因するものと考えられます。当プロジェクトはこうした「こころの問題」に苦悩する方々と向き合うことのできる曹洞宗僧侶を育成する事を目的として取り組みを継続しています。

プロジェクトの成果と今後の予定

○シンポジウム開催

「只管打坐とマインドフルネスとの対話～一仏両祖が目指した坐禅とは～」と題して、センター学術大会にてシンポジウムを開催しました。

近年、ヴィパッサナー瞑想やマインドフルネスに対する関心が、日本国内でも高まっています。シンポジウムでは日本テーラワーダ仏教協会長老のアルボムッレ・スマナサーラ長老、早稲田大学人間科学学術院教授・応用脳科学研究所所長の熊野宏昭先生、曹洞宗国際センター所長の藤田一照老師をお招きし、これに当プロジェクトメンバーを加えてパネル発表と質疑応答を行いました。

ヴィパッサナー瞑想やマインドフルネスとは、そもそも如何なるものなのかを学び、また本来、釈尊や道元禪師、瑩山禪師が求め目指した禅とはどのような教えであったのか、またそうした教えを現代社会に生かすには、我々曹洞宗僧侶はどのように取り組んでいくべきかを再確認するために、有意義な議論が出来ました。またシンポジウム終了後、この内容を整理・再検討し、今後どのような形で活用するかについての議論と研究を続けています。

当プロジェクトは、今後も「人びとのこころの向き合う」さまざまな活動を育成・支援するための、

研究・啓発活動に継続して取り組んで参ります。

プロジェクトメンバー（50音順・敬称略）

秋央文、宇野全智（リーダー）、勝俣暎史、金子宗元（座長）、君島真実、久保田永俊、関水博道、館盛寛行、中野尚之、前田有全



「宗教と法律」研究プロジェクト

裁判員制度発足を機に本研究プロジェクトは活動を開始し、この法治社会の中で、「(宗教者の立場から見て) 人間の心にある善と悪とは何か」「人間の罪とは何か、罰を与えるとはどういうことなのか」を研究課題として掲げています。それを解明するべく、本研究プロジェクトは、総研委託研究員として招聘した落合洋司先生(弁護士、東海大学法科大学院教授)と協議をしながら、日々研究作業を進めております。

2016年度は多くの御示唆を頂戴いたしました。例えば、定期的に出席しております裁判員ラウンジ(裁判員経験者や弁護士との語らいのオープンスペース。年4回開催、専修大学神田校舎)において、裁判員を経験した臨床心理士の方から、あるいは事件当時未成年だった被告人に裁判員裁判で死刑が宣告され、確定した事件を担当された弁護士の方から、「宗教者の方との協同」の問題提起がありました(2016年6月・9月)。

また、2015年10月開催のシンポジウム「宗教と法律 「裁判員制度」を考える」にて、パネリストの平川宗信先生(名古屋大学名誉教授)より提案を受けて以来、より身近に私どもの研究課題を考える手立ての一つとして、昨今注目されつつある「修復的司法(修復的対話)」の研究を進めております。

「修復的司法(修復的対話)」とは、ニュージーランドで始められ、欧米へと拡大したものであり、加害者と被害者、それぞれの家族、地域の人々が一つのテーブルを囲んでの話し合いを指します。被害状況の説明、原因の究明、何が足りなかったのか、今後の償いの内容、家族の支え(特に加害者側)、地域にも問題はなかったか等を参加者間で話し合い、当事者間で約束したことが実際に行われるようサポートを約束し、コンセンサスが得

られたら、皆で約束を守れるようにしていくものです。課題はあるものの、地域社会に住む「人間力」を取り入れた事案解決であり、少年犯罪やいじめ対策への応用も説かれています。上記研究課題を考える上でも、そして人びとの心に寄り添うべき宗教者の立場から見ても、注目すべきものと思われます。「第51回 教誨師中央研修会」(2016年8月、法務省)でも、宗教者の方がたに参加してほしい試みとの提案がありました。

継続入会の宗教法学会(年間2回)にも積極的に参加し、宗教と法律が切り離せないものであることを痛感しております。

宗教をめぐる世事は時期によって変化するものです。上記の社会において出されている問題提起に、宗門人が関心を持ち、本研究プロジェクトが研究・分析した結果を社会へ還元していきたいと考えます。すべての人びとの悩みや痛み、苦しみを真摯に受け止め、より良い社会への提言をなすことが宗教者の務めであり、この研究課題は宗教者にとって大切なものといえます。宗教者の法教育の重要性を情報発信していくことが必要であると痛感しております。

今後も、本研究プロジェクトは研究課題に基づいた活動を継続していきます。その内容を取りまとめた後、宗門内外に『曹洞宗報』『曹洞禅ネット』を中心とした情報発信の基盤を構築し、広く意見を頂戴していくことを目指します。

プロジェクトメンバー (50音順・敬称略)

落合洋司、宮地清彦(リーダー)

研究活動報告

「宗典データベース」プロジェクト

プロジェクトの趣旨・目的

パソコンやスマートフォン、タブレット端末などの電子情報機器が広く普及し、盛んに活用されている昨今の状況から、文献資料を扱う諸々の研究分野においても、こうした機器を有効に活用してゆく方法が種々に模索されています。

諸学問のうち、膨大な記述資料を扱わなければならない研究領域では、それらを電子テキスト化し、かつデータベースを構築しておくことで、必要な文献について、パソコンなどを用いてその内容を簡便かつ短時間に、検索や閲覧、コピー、種々の解析をおこなうことが可能になることから、目下、各方面で当該作業が強く推し進められています。

万巻にも及ぶ仏典ならびに禅籍・宗典類、史料類を研究対象とする仏教学や禅学・宗学の文献研究領域でも、文献資料の電子テキスト化とデータベース構築が急がれています。

こうした状況を鑑みますと、現代において道元禅師・瑩山禅師ならびに歴代祖師の思想大系や曹洞宗史等に関する研究・学習のさらなる隆盛と発展を期するためには、その大きな一助として、宗典の電子化とデータベース構築が急務と言えます。本プロジェクトは、こうした現代の必要性に応えてゆくべく発足しました。

当面の事業としては、いずれも絶版となっている『曹洞宗全書』（18巻、本文13114頁）と『続曹洞宗全書』（10巻、本文8366頁）について、電子化とこれに付随する関連作業をおこなってまいります。本作業は、平成22年4月1日より開始し、年毎の計画案にそって上記両全書の電子化作業を鋭意進めてゆきます。

プロジェクトの成果と今後の予定

2016年度においては、『曹洞宗全書』第16巻（史伝上）、『曹洞宗全書』第17巻（史伝下）、『続曹洞宗全書』第3巻（通巻第21巻、語録一）の電子化を完了しました。また、『曹洞宗全書』解題部については、通巻第19巻半ば（No.334）までの入力を終えました。

なお、2015年度までに、『曹洞宗全書』は第1巻～第5巻、第15巻、第18巻、『続曹洞宗全書』は第1巻、第5巻、第9巻、第10巻の電子化作業を終え、同解題部は第17巻までの入力を終えております。

2017年度は、『曹洞宗全書』・『続曹洞宗全書』のうちから、電子化未了の3巻を選び電子化作業を継続する予定です。解題部については、未了分のうちの5巻分程度の解題の入力をおこないたいと考えております。

従来どおり、本体の電子化作業は専門業者に依頼するかたち進めてゆきます。解題部は、メンバーの手作業により入力し、テキストファイル化します。

プロジェクトメンバー（50音順・敬称略）

石原成明、加藤龍興（サブリーダー）、小早川浩大、清野宏道、古山健一（リーダー）



「梅花流詠讃歌」研究プロジェクト

プロジェクトの趣旨・目的

梅花流詠讃歌は、本宗における布教教化において大きな位置を占めています。

しかしながら、学術的な観点から梅花流詠讃歌を捉え、さらには、宗門の教化施策に反映させてゆく、という試みはこれまで行われてこなかったように思います。

このような問題意識から、当プロジェクトでは梅花流詠讃歌を教団史・教学・布教教化の3つの視点から捉え、今後の梅花流の歩みにフィードバックさせてゆきたいと考えています。

教団史

梅花流は昭和26年に発足しておりますが、この頃（草創期）の動向に焦点を当て、考察したいと思っております。発足当時、梅花流が曹洞宗という教団においてどのようなことが期待され、教団の中長期的なビジョンの中でどのように位置づけられたのか、当時の歴史的・社会的状況を十分考慮しながら検討してゆきたいと思っております。

教学

梅花流の曲には、両祖を始めとした先人の作による和歌を歌詞として用いたものが多くあります。こうした歌詞を教学の視点から考察することによって、梅花流が本宗の宗旨・教義上にどのように位置づけられるのかを明らかにしたいと思っております。

布教教化

梅花流は発足当時から布教教化の上で重要な役割を担ってきました。現在、講員数が減少する傾向にありますが、改めて教化における意義や機能を再確認し、さらに、現代の人びとに親しんでいただく方途について考察してゆきたいと思っております。



プロジェクトの成果と今後の予定

当プロジェクトが扱う研究分野のうち、特に教団史に関わる事柄を中心に、研究をしております。

これまでの研究を通じて、梅花流が教団において担ってきた役割や機能を明らかにしてきました。そうした成果を『曹洞宗報』において連載形式で発表することとし、2017年1月号より、「曹洞宗教団史における梅花流」と題し、隔月の予定で連載を始めております。是非御一読ください。

また、2016年度学術大会では、『梅花流指導必携』の変遷～梅花は曹洞宗の教義にどう位置づけられてきたのか～というシンポジウムを開催しました。『梅花流指導必携』は、それ以前の解説書を含め、何度にも及ぶ変更や改訂を経て、現在に至っています。梅花布教を通じて曹洞宗がその教義をいかに敷衍しようとしたのか、諸資料の変遷を見ながら、その足跡の検証を試みました。詳細については、今後、冊子化する予定です。

さらに、全国各地における梅花流の伝播、展開についての調査の一環として、2016年12月に、島根県第二宗務所管内を現地調査しました。今後も各地での聞き取り調査、資料調査を予定しておりますので、御協力をお願いできれば幸いです。

プロジェクトメンバー（50音順・敬称略）

小嶋弘道、佐藤俊晃（座長）、清野宏道、関水博道（リーダー）、松井量孝、務臺孝尚

研究活動報告

布教・教化実践モデル開発研究プロジェクト

プロジェクトの趣旨・目的

僧侶の活動や曹洞宗の教えが多くの人びとに役立つものとして展開できるよう、特に実践的かつ具体的な布教・教化活動のモデル作りを目的として、当プロジェクトは活動を進めています。

プロジェクトの成果と今後の予定

朝活禅研究班

「朝活禅」とは曹洞宗檀信徒会館で出勤前の会社員を主な対象として開催している朝の坐禅会です。全6回を1セットとして年間2クールを開催しています。2010年から開催し、30代から40代を中心とするたくさんの方がたにご参加いただけてきました。ありがたいことに「自坊での坐禅会開催の参考にしたい」と見学のご希望や資料の請求を頂くことも増えています。こうした声を受け、現在は、坐禅指導上の留意点や開催にあたって注意している点（運営面、告知面ほか）など、朝活禅の開催を通じて蓄積してきた事柄をまとめる作業を進めているところです。



自死問題研究班

自死（自殺）者数は近年減少傾向にあるものの依然高い水準にあります。特に自死遺族が抱える

「生きにくさ」の原因は、誤解に基づく宗教的・社会的偏見などが大きく影響しているのです。自死問題研究班では「祈りの集い—自死者供養の会」を定期的に開催するとともに、宗教者が果たすべき役割について研究を続けています。今年度は今まで参加された遺族から、ひき続き平日開催を望む声に応えるべく実施しました。遺族の皆さんは「安心して、心静かに祈りを捧げることができる時間を過ごせた」「自分だけが苦しんでいるのではなかったことを実感できた」など、場の存在を感謝される方が大半です。また、こうした祈りの集いを開催したい県に講師を派遣するなど講義を担当し、運営の協力も担いました。



情報誌『kuu:』作成班

全国の宗侶と寺族の方がたの日々の檀務に役立てていただくことを目指して発行しているのが情報誌『kuu:』です。法話の話材や檀信徒との交流のヒントとして活用していただくことを意図しています。毎回特集テーマを設け、様々な切り口から、現代における教化の一助となる視点を探り、探求していきたいと思っております。2016年度は「そうだ、webをつくろう。」をテーマとしました。ホームページやSNSなどwebの活用は、寺院においても今後ますます必要となって来るで

しょう。檀務における一助としていただければ幸いです。



復興支援プロジェクト

東日本大震災で被災された方がたの心に寄り添うことを目指して、紙芝居、ビーズ・ブレスレット作りや匂い袋作りを行ない、これらを通じた傾聴活動に取り組んでいます。参加者の感想は「香りがよくて、ぐっすり眠れそうです」「こんなに落ち着く気持ち、穏やかになれたのは、本当に久しぶり」など好評でした。訪問先は災害公営住宅や仮設住宅の集会所だけでなく、高齢者福祉施設、放課後児童クラブ、保育園など多岐にわたり、各地域から来て欲しいという要望をいただきました。支援活動が縮小傾向にあるなか、継続的な関わり大切さを痛感します。また匂い袋作りは、寺族研修会の講義内容に採用され実施しました。各支援活動の日程等は「事業報告」をご覧ください。

プロジェクトメンバー（50音順）

宇野全智（リーダー）、君島真実、久保田永俊、小杉瑞穂、関水博道、長岡俊成、中野禅隆、西山修浩、横山俊顕、（記載は常勤研究員・委託研究員のみ。他、内部協力者、外来協力者多数。）



研究活動報告

プロジェクト「住職学」—宗侶養成のための教科書及びカリキュラム作成プロジェクト—

プロジェクトの趣旨・目的

当プロジェクトでは、これまで宗侶を養成してきた寺院内・大学・僧堂だけでなく、教団主導による宗侶養成の必要性和可能性を考え、それに応えるテキストやシステムを作成、提案することを主眼にしています。

一人前の僧侶、住職となるために何を身につけなければならないか？社会が大きく変わっていくなかで、新たに身につけていくべき知識や視点はこういったものか？こうした問題点を議論の出発点にして、宗侶育成の現状の把握と問題点の指摘、今後への方策を示していくことを目的としています。

プロジェクトの成果と今後の予定

①首先住職研修会での2つの講義「住職の心得、葬儀」「曹洞宗の宗旨と教義」を担当。2010年度以降、継続的に内容の見直し・検討をしながら、住職任命時に再確認しておいていただきたい内容を講義いたしております。今年度においては、質問紙での調査をお願いし、受講者にこれまで僧侶として身につけてきた知識や事柄についてお聞きしました。これは現状の教育体制のなかで、師寮寺、大学、僧堂にてそれぞれが、どのように習得しながら成長されてきたのかを確認するものです。また今後に学びたい事柄についても尋ねており、来年度中に集計・分析をしていけるものと考えています。

②他教団における僧侶育成の情報収集として、智山派教化センターにご協力いただき、訪問のうえ調査をさせていただきました。同教団は関東圏に多くの寺院が位置し、また他の職業との兼職率も高い特徴があり、その教師資格取得システムは、大学卒業時の就職に影響しないことを前提に作ら

れています。大学在学中にスクーリングや僧堂での短期修行などを組み合わせることで、必要な資質を取得できるように構成されています。また、教師任命後の昇進の際には、いくつかの講義を受講することで得られる単位を重ねることで、僧侶としての資質を高め、参究心が具わるように図られており、参考にすべき点が多々ありました。

③智山派への調査研究時に『智山教師ハンドブック』を提供いただきました。これは初学の智山派の僧侶が学ぶべき事柄をコンパクトにまとめたものとなっています。B5版で300頁超になりますが、カラーでわかりやすくまとめられたものです。曹洞宗においても『宗侶必携』や多くの手引書が出されておりますが、その手前の指南書として一冊にまとめたものはなく、こうした書物は、これから教師・住職を志す方への大きな助けとなると考えます。現在これを基に曹洞宗版のハンドブックの構成を検討し、作成に向けて作業を進めていっております。

プロジェクトメンバー（50音順・敬称略）

石原成明、宇野全智、金子宗元、久保田永俊、小早川浩大、関水博道、晴山俊英、平子泰弘（リーダー）、古山健一、宮地清彦



「追善供養」研究プロジェクト

プロジェクトの趣旨・目的

当プロジェクトでは、葬儀の後に営まれる種々の供養に光を当て、年回法要などの追善供養それぞれの意味や起源などを明らかにしていきます。

これまで大家族で地域のつながりも強かった頃には、故人の供養は当たり前のこととして営まれていましたが、近年においては省略される傾向もあり、そこには供養する意味が受け継がれていないようにも見受けられます。改めて私たち僧侶が、供養の持つ意味やはたらきを確かめながら法要を勤め、教えを説いていくことが求められていると考えます。

以上のような必要性から、それぞれの供養の歴史やそこに込められた死者への眼差し、思いを示していきたいと思えます。また、これからの時代に合った供養のあり方や捉え方を考察していくことを目的として進めています。

プロジェクトの成果と今後の予定

初年度であった2015年度は、供養に関する資料の収集と、その内容の検討を行いました。今年度は内容を検討した諸資料を基に、供養をどのように分類し項目を立てて全体を見通すことができるかを大きな課題とし、研究成果の構成、項目案作りを進めました。

構成案作成後に順次、原稿化の作業を予定していましたが、わかりやすい構成案作りは意外にも難しい作業となりました。その背景には「供養」を総体的に捉えたこれまでの研究や書籍がほとんど無いこと、そして、「供養」を語る上で根拠をなす死者の存在や世界観、すなわち一般に「霊」「靈魂」「来世」などの捉え方についても概説されたものが少なく、さらには、現代において、仏教の立場からどのように紹介していけるか、紹介し

ていくべきかという大きな課題が出てきたことにあります。

「お位牌を祀り亡き人の面影を思い出し、遺影（頂相）を見ては声を掛け、墓石の前で手を合わせ過ぎし日々を思いをめぐらす。」このような亡き人を思う供養の心は、普遍的に誰もが持ち得ていると言えましょうし、私たち僧侶も「いますが如く」に供養を伸べてきていることに違いはないものと確信いたします。

こうした供養の心が、人びとにも理解され受け継がれていくことが望まれることであり、私たち僧侶はそうした供養を執りおこなう役割を担ってきたわけです。「供養」をめぐる歴史やはたらきを共有していける成果を披瀝できるよう、引き続き研究作業を進めていきたいと考えております。

プロジェクトメンバー（50音順・敬称略）

石原成明、小早川浩大、佐藤俊晃、永井政之、平子泰弘（リーダー）、古山健一



（左写真）供養参、（右写真）真俗仏事編

研究活動報告

曹洞宗の「教義」に関する研究プロジェクト

プロジェクトの趣旨・目的

『曹洞宗宗憲』に「教義」として位置付けられる修証義の「四大綱領」について、より有効な布教教化の方途を探るべく研究を続けています。

プロジェクトの成果と今後の予定

これまで、平成25年度・26年度の現職研修会において「四大綱領を学ぶ」を全国統一テーマとした講義が行われ、総研研究員が中心となってテキストを作成し、また講義を担当してきました。ここでは曹洞宗寺院で日常的にお唱えされる機会の多い『修証義』の教えを、『曹洞宗宗憲』に「教義」として位置付けられる「四大綱領」の脈絡で体系的に整理し、檀信徒と僧侶が僧俗一体となって行じることの出来る「今の時代を生きる人びとの、安心に至る具体的な指針」として提案することを意識して講義を進めて参りました。

また、平成27年度においてはさらに「菩薩の誓願」を生み出す原動力としての「懺悔滅罪」と「授戒入位」の重要性に着目し、より多くの方々に信仰の第一歩となる受戒の機会を提供することを目標として『修証義』による授戒「発願式」の提案」と題した講義を現職研修会で開催し、あわせて受講者に対するアンケート調査を実施いたしました。

アンケートには、修証義に対する僧侶の意識、また「発願式」に対する賛否や具体的な提案など有益な情報が数多く見受けられ、これらは今後宗門が教義を展開する上で非常に価値のあるものと思われます。本プロジェクトではこれらのアンケートを分析するとともに、「寺族葬儀法」制定にない、現場の意見を反映する形での「発願式」差定を再度検討するとともに、ニーズとして見られる「関連する教化教材」「受戒の証明となる何

らかの印」「僧侶側の手引書」などについても作成に向けた研究を進めています。

プロジェクトメンバー（50音順・敬称略）

秋央文、石原成明、宇野全智（リーダー）、金子宗元、関水博道、菅原研州



講義で使用したテキストは、曹洞宗公式サイト「曹洞禅ネット」寺院専用ページで、閲覧することが出来ます



研修会に参加して頂いた方々から、1500件を超える貴重なご意見を頂きました

総合研究センターには、研究とともに人材養成のための研修機関としての役割があります。

宗学研究部門

宗学研究部門では、道元禅師及び瑩山禅師に関する曹洞宗学研究を中心として、曹洞宗に関する事柄を多角的に調査・研究しております。具体的には、「道元禅師の総合的研究」「瑩山禅師の総合的研究」と題し、両祖の思想を総合的に捉える試みや、曹洞宗に関連する文献、研究論文などの調査と目録化を行なっております。また研究員各自が研究課題を設定して独自に研究を行い、各学会や当センター学術大会において日々の成果を発表し、当部門発行の『宗学研究紀要』においても研究論文の形で報告しております。その他にも部門外の活動として、当センターが主催するプロジェクトや宗務庁からの委託業務などにも参画しております。

1. 道元禅師の総合的研究



本研究では、駒澤大学仏教学部名誉教授である石井修道博士にご指導頂き、平成23年度までに行われた出典研究を基礎としながら、平成24年度以降は継続して文亀2年書写（伝・光周）本「典座教訓」の翻刻、並びに訓読文・語註作成を行っております。

出典研究には、江戸時代の面山瑞方による『渉典録』、これを受けた万仞道坦の『渉典補闕録』、黄泉無著の『渉典統紹』など幾多の軌跡があります。近年では昭和40年、故鏡島元隆博士が『道元禅師と引用経典・語録の研究』を上梓されました。当部門の前身である宗学研究所においても鏡島博士監修のもと、研究成果として『道元引用語録の研究』を刊行しております。引用経論の解明は、禅師の思想をより明確にすると共に、宗学研究発展の礎として位置づけられるものと考えております。

こうした先達の研究を引き継ぎ、現在整備が進む仏教典籍・中国古典のデータベース等を用い、平成19年から平成23年にかけて「対大己法」「衆寮箴規」「赴粥飯法」「知事清規」の研究成果を発表いたしました。本年度は、昨年度に引き続き、「典座教訓」の典拠を解明することはもちろん、一層の理解を目指して語義解釈を含めた研究を行っております。

底本は、諸本ある「典座教訓」の中から永平寺15世、光周の代に書写された文亀2年書写本を選

択いたしました。本書は、書写年代等の事由から、従来道元禅師の原著に近いことが指摘されており、資料的価値の高さは広く認められておりました。

そのため、既に『永平寺史料全書』において翻刻がなされているのですが、当該書には誤植が散見されます。また、現行の入手しやすい出版物等では、殆ど本書が使用されておられません。講談社学術文庫『典座教訓・赴粥飯法』は本書を底本とする数少ない出版物ですが、凡例を見ると、確証がないにも関わらず本書を「光周による書写本」と紹介しております。さらに、訳註者の手が加えられていることから、純粋に底本として使用されているとは言えません。

こうした現状から、当研究では従来に比してより正確な翻刻を行い、本書が文亀2年に某僧の手によって書写されたという事実も含め、諸本と対校しながらその特徴を公開したいと考えております。それは、今後の宗学研究者にとっての一助となるばかりでなく、洞門の有する貴重な史的価値を広く世に公開するという、意義深い成果につながると考えております。

「典座教訓」は、洞門宗侶における食事の基本書であるのみならず、行の重要性や三心の心構え等、道元禅師における根幹的な思想や肝要な説示を数多く含む著作です。平成17年に食育基本法が施行されたことにより、食育という言葉を目にする機会が多くなりました。布教・教化の場においても、道俗を問わず日常的なテーマである食事を扱うことも多く見受けられます。食事という身近な題材を通して

研修活動報告

道元禅師の教えに触れられる同書は、布教・教化の面においても非常に有益な典籍と言えましょう。

このように、「典座教訓」を用いて道元禅師の教えを敷衍する布教・教化の現場を念頭に置き、それに堪え得る翻刻・訓読・語註・出典の作成を目指した研鑽を重ねております。そしてその成果の一部を報告する試みとして、平成 27 年度刊行の『宗学研究紀要』第 28・29 合併号で「典座教訓の註釈的研究（上）」を掲載いたしました。引き続き、今後も同研究の続編を随時報告してまいります。



2. 瑩山禅師の総合的研究

本研究は、当センター副所長志部憲一先生のご指導のもと、瑩山禅師に関するこれまでの研究を踏まえながら、伝記や著作、思想などの総合的な把握を通して、瑩山禅師研究の進展を目的としています。



これまでの宗学に関する研究を概観すると、道元禅師に比して瑩山禅師に焦点を当てた研究は少ないように思われます。そのため、当部門では、平成 24 年度から「道元禅師の総合的研究」「瑩山禅師の総合的研究」という二つの課題を立て、両祖に関する研究を同等に行なうこととしました。

瑩山禅師の研究を始めるにあたり、当部門が作成している『曹洞宗関係文献目録』などを駆使しながら、これまでの研究動向を把握するところから取りかかりました。文献目録は、伝記や著作、思想に関する研究がテーマごとに分類され、かつ年代順に整理されていますので、それらを一覧することにより研究動向の大枠を踏まえながら、今後どのような視点で瑩山禅師の研究にアプローチしていくかについて議論を重ねてきました。たとえば、瑩山禅師が民

衆への教化を重んじたことは夙に指摘されているところですが、どのように民衆教化を展開し、教線の拡大を試みたかなど教団論的観点からの研究も念頭におかなければなりません。また、瑩山禅師の伝記については、先学による研究成果が報告されていますが、個々の問題については、改めて検証しなければならない点もあります。

そこで、平成 25 年度は、瑩山禅師の伝記に関する論考を概観し、意見交換を通して、今後検討すべき問題点の抽出作業を進めました。

更に、平成 26 年度以降は、伝記に関する資料はもとより、瑩山禅師に関する論文資料を網羅的に収集することに努め、平成 28 年度は、曹洞宗宗務庁内の刊行物として過去に発表されてきた当該論文を、論文集として纏めるという形で一成果といたしました。

今後は、この論文集を研究のために活用するとともに、更なる論文蒐集についても継続してまいります。

3. 曹洞宗の歴史に関する現地研修

当部門では、両祖を中心とした文献学的な研究活動を机上で行うだけでなく、曹洞宗史という観点から現地研修も実施しております。



主たる目的は、実際に現地に足を運ぶことで明確になる、当該寺院の歴史的経緯やそれを取り巻く環境を直に体感し、知見を深めて研究の示唆を得るこ

とにあります。また、伽藍や境内地を拝観させていただくことにより、建築様式などの文化的側面について学び取ることも重要な目標に掲げております。

平成 28 年度は、峨山韶碩禅師の高弟である無底良韶禅師を開山とする岩手県の正法寺を中心に研修を行いました。従来調査研究されていた資料を再確認する作業は勿論のこととして、実際に蔵内に立ち入る許可を頂いた上で、そこに収蔵されている未整理の古文書についても調査させて頂く機会にも恵まれましたので、大変有意義な研修会となりました。今後も現地研修を継続し、広い視野から曹洞宗に関する知見を深めてまいります。

4. 『曹洞宗関係文献目録』の作成

当部門では、曹洞宗に関する文献や論文などを蒐集・分類し、継続的な目録の作成に取り組んでおります。対象としては、学術的な専門書や各学会誌などに掲載された研究論文をはじめとし、兩大本山から刊行された『傘松』、『跳龍』誌、曹洞宗宗務庁から発行された『曹洞宗報』、『禅の友』、『てらスクール』などの宗門関係の刊行物のなかで掲載された論考、随筆文などからも幅広く収録するように心がけております。本目録の書誌情報が、近年の曹洞宗に関する研究動向や関心などを把握する際の一助とな

れば幸いです。

平成 26 年度に刊行された文献や論文等につきましては、「曹洞宗関係文献目録」(23)として『宗学研究紀要』第 30 号のなかで報告しております。又、過去に蒐集したデータにつきましては、曹洞禅ネット (<http://www.sotozen-net.or.jp>) の宗学研究部門・データベース(曹洞宗関係文献目録オンライン検索)に公開しておりますので、併せてご利用頂ければ幸甚にございます。

5. 『宗学研究紀要』編集・発行

各研究員の研鑽の成果は、当部門発行の研究報告誌『宗学研究紀要』のなかで発表しております。平成 28 年度は、第 30 号を編集し発行致しました。内容の梗概を示しますと、次の通り「個人研究論文六篇」と「曹洞宗関係文献目録」で構成されております。



- ・「空劫已前」考(小早川浩大専任研究員)
- ・『洞谷記』記載「看経法」に関する一考察(石原成明専任研究員)
- ・道元禅師を通して見た如浄禅師の実像(清野宏道専任研究員)
- ・「瑩山禅師撰『伝光録』の構成法」再考(加藤龍興研究員)
- ・『上井覚兼日記』にみる中世の寺院機能—曹洞宗福昌寺を中心に—(澤城邦生研究員)
- ・「瑩山清規」亡僧章の出典研究(角田隆真研究員)
- ・「曹洞宗関係文献目録」(23)

6. その他

宗典編纂委員会 委員・・・加藤研究員

寺族研修会 講師・・・澤城研究員

宗勢総合調査委員会 委員・・・澤城研究員

『曹洞宗研究員研究紀要』第 47 号編集・・・加藤研究員、澤城研究員、角田研究員

研修活動報告

教化研修部門

研修部

所外実地研修報告



若草幼稚園

東京都大田区にある、宗教法人円能寺立若草幼稚園。ここでは成田山新勝寺の仏教理念に基づく建学の精神のもと、幼児教育が行われています。

園児は、1日1回は不動明王真言を唱え、仏教聖歌を歌い、入卒園時には住職の加持祈祷が行われていますが、仏教の教えを一方的に押しつけるようなことは行っていないといえます。

宗教法人立で園舎が境内にあるという立地上、不特定多数の方々が出入りする中で園児を守るという難しさと工夫についても詳しくお話を聞くことができました。



シャンティ国際ボランティア会

JR千駄ヶ谷駅から徒歩6分ほどにある公益社団法人シャンティ国際ボランティア会の事務所にお邪魔しました。元は宗門僧侶が中心となって立ち上げ

られたこの団体。その歴史についておうかがいし、活動の一つである、「絵本を届ける運動」に実際に協力させていただきました。

日本語の絵本に現地の言葉のセリフシール貼っていく作業。読み書きができない、絵本を読んでも人がいない発展途上国の子どもたちへ、絵本を手にする機会をつくる、素晴らしい活動です。



東京都中央卸売市場食肉市場

品川駅は港南口から徒歩5分に位置する東京都中央卸売市場食肉市場（以下、芝浦屠場）は、大都市東京の巨大な牛、豚肉の需要を一手に担う食肉加工場です。今回の研修では事前学習と見学の二回に分けて食肉加工について学びました。

一回目の事前学習では、展示資料を用いながら牛や豚の解体行程から芝浦屠場の歴史と変遷に至るまで、詳しくお話を聞くことが出来ました。

2回目の見学では、手を伸ばせば触れられる距離で実際の加工工程を見学させていただきました。

見学後の意見交換会では、同年代の若手職員の方から、仕事に対する思いや差別の現状、仏教に対する思いなど普段聞けない生の声を聞かせていただきました。



「教団と人権 2」 実地研修

2 年度の講義の一環として、差別戒名墓石が合祀されている長野県丸子町「長福寺」様を訪れました。講義を通して差別戒名やその歴史については学んでいましたが、実際に石に刻まれている戒名を拝見

したのは初めてでした。当日はまず墓石の前で般若心経をお唱えさせていただきました。その後、墓石一つひとつに刻まれた戒名を見て回りましたが、現在でもはっきりと文字が確認できるものもあれば、風化してほとんど文字が見えなくなってしまうものもあり、差別の歴史の長さを実感させられる思いでした。

そして、今までビデオでの学習や資料写真のみでしか見たことがなかった差別戒名墓石を実際に目の当たりにし、あまりにも直接的な表現に驚くとともに、このように後世に残る戒名をつける僧侶という立場の責任の重さを実感させられました。机の上での学びだけではなく、実際に現地に足を運び学ぶことの大切さを感じる研修でした。

平成 28 年度 教化研修部門 週間予定・講義一覧

		1 (9:00 ~ 10:30)	2 (10:40 ~ 12:10)	3 (13:00 ~ 14:30)	4 (14:40 ~ 16:10)	5 (16:20 ~ 18:40)
月	通年	実 習 日 (高齢者福祉施設法話伝道)				
火	前期	本尊上供・事務打合	《研究部研究会》 《コース研究会》	法話実習 2(3) 日用経典 2(1)	宗教と現代・社会 (2) 話しことば (1)	
	後期		布教理論 (1)	《コース研究会》	詩偈 (3) 教化活動法 1(2) 国際伝道史 (1)	人間と宗教 3 (3)
水	前期		《コース研究会》 教化学特講Ⅰ (究)	宗典 2(3) 法式実習 (2) 教団と人権 1(1)	《研究部研究会》	《伝道実習》
	後期		教化学特講Ⅰ (究) 参禅指導 (1)	《研究部研究会》 仏典 1(2)	人間と宗教 2(3) 禅宗史 (1)	
木	前期	《坐禅教室》	《研究部研究会》 曹洞宗学 (2/3)	《研究部研究会》 日用経典 1(1)	宗典 1(2) 法話実習 1(1)	
	後期		《研究部研究会》 釈尊論 (1)	《コース研究会》		
金	前期	仏教教育 (3)	教団史 (2)	《コース研究会》 教化学特講Ⅲ (究)	教化学特講Ⅲ (究)	
	後期	現代教団論 (3) 教団と人権 2(2)	《研究部研究会》 《コース研究会》	教化学特効Ⅲ (究) 教化活動法 2(2) 人間と宗教 1(1)	教化学特効Ⅲ (究)	
土	通年	実 習 日 (高齢者福祉施設法話伝道・駒沢坐禅教室・駒澤大学高等学校特別講義)				

() 内は 1,2,3, 全は研修部の各年次、究は研究部の講義。《 》は研究会。

各講義は前・後期制をとり、前期 (4 月～9 月)、後期 (10 月～3 月) で開講される。

研修活動報告

教化研修部門

研究部

世界一フラットな宗教研究所

S-Labo 【えす-らぼ】



【はじまり】

S-Labo プロジェクトは、研究部で行っている布教モデル研究の一環で提案されました。これまで、「祈りの集いー自死者供養の会」や「就活生のための禅講座」などが、研究生自身の問題意識がきっかけとなって提案されています。

例えば、就活生の禅講座が提案されたきっかけは、20代の自殺率の高さに気が付いた研究生がいたことに端を発します。

今回の S-Labo は、インターネットを活用する布教モデルとして提案されました。

Web 上で行うことで、所員の問題意識を自由に発信できるようにしています。

【手法】

S-Labo は、インターネット上にある研究所です。主に、所員が作成した記事を発信しています。これらの記事は、所員の個人的興味によって作られています。例えば、結婚の歴史や僧侶が関わった逸話、演劇を使った布教の可能性、音楽と仏教の関わりなど、様々な記事が掲載されています。また、LGBT を始めとする性的少数者に関わっている方とのインタビュー記事もあります。

【特徴】

宗門では、「曹洞禅ネット」という Web サイトを

『曹洞禅ネット』

<http://www.sotozen-net.or.jp/>



運営しています。S-Labo もサイトの一種ですので、一見、同じようなものに見えます。

しかし、曹洞宗の公式サイトである「曹洞禅ネット」は、宗門そのものを説明するためのものです。S-Labo は宗教、特に仏教に興味を持ってもらうためのもの、というところに違いがあります。

S-Labo の特徴は、僧侶の顔が見えることです。そして、曹洞宗の公式見解ではなく、僧侶一個人としての意見を述べるようにしています。

曹洞禅ネットでは、曹洞宗の核となる教えを丁寧に見てもらうという役割を持ち、S-Labo は一個人に特化して、宗教の一面を切り取って伝えていくことが役目となります。

『S-Labo』

<http://S-Labo.org/>



『S-Labo のねらい』

S-Labo の「S」には宗教という言葉と、曹洞宗という言葉がかけられています。これには、まず宗教を知って欲しいという願いがあります。

以前、お釈迦様を知らない 20 代の若者に出会いました。無宗教という方がいることは知っていましたが、宗教自体の情報を持たない人に会ったことがなかったので、とても驚いたのです。

S-Labo がきちんと形になれば、そういった時代の変化に、曹洞宗が出来ることが増えます。インターネット上の記事ですから、発想してから発表までの時間が短縮され、公式見解ではなく、僧侶の考えなので、責任の所在を明確にし、批判や意見に応じることが出来ます。

フラットな目線を保ち、僧侶として発信できる場として、これから S-Labo を育てていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

学術大会開催報告

第18回学術大会開催報告

2016年11月16日～17日
於曹洞宗檀信徒会館3・4階

第18回学術大会が、2016年11月16日～17日の日程で、曹洞宗檀信徒会館（東京グランドホテル）にて開催されました。

大会は3会場にて行われ、シンポジウム2件の他、パネル発表・リレー発表がそれぞれ1件、38件の個人発表が行われました。連日多くの聴講者があり、盛会裏に閉幕しました。

大会初日は、午前9時30分より「桜の間」にて開会式が行われました。本尊上供、宗歌斉唱に引き続いて、成田教学部長、大谷哲夫総合研究センター所長がそれぞれ挨拶をなされました。

引き続き、午前10時から、「桜の間」にて、「このころの問題」研究プロジェクトシンポジウム、只管打坐とマインドフルネスとの対話～一仏両祖が目指した坐禅とは～が開催されました。

このシンポジウムでは、グーグル、インテル、イギリス国会などでも取り入れられ、世界的に注目を集めている自己管理、ストレス軽減法としてのマインドフルネスがありますが、こうしたマインドフルネスに対する関心は、日本国内でも近年の禅ブームと相まって、非常に高まっています。この様な状況に鑑み、マインドフルネスを確認し、只管打坐を標榜する宗門の坐禅をどの様に伝えていくべきか、道元禅師、瑩山禅師が求め目指した禅とは、どのような教えであったのか、またその教えを現代社会に生かすためには、われわれ宗侶はどの様に取り組んでいくべきか。その様な観点から協議検討いたしました。

パネリストにはアルボムツレ・スマナサーラ日本テラワーダ仏教協会長老、熊野宏昭早稲田大学人間科学学術院教授、藤田一照曹洞宗国際センター所長の三氏を迎え、それぞれの立場からの発表をいただきました。昼食の後会場からの質疑答える形で、活発な意見交換が行なわれました。また、午後3時半より、パネル発表「終活」を考える－教化と安心をめぐってと題して、関水博道専任研



成田隆真 教学部長



大谷哲夫 総合研究センター所長

究員を中心に発表がされ、忌憚のない活発な議論が行なわれました。

大会第二日は、午前9時30分より「桜の間」において、梅花流詠讃歌研究プロジェクトによるシンポジウム『梅花流指導必携』の変遷～梅花は曹洞宗の教義にどう位置づけられてきたのか～が行われました。道元禅師700回大遠忌の年に産声を

あげたのが梅花流詠讃歌でありました。折しもそれは平和条約が発効され日本の独立が認められた年であり、宗門においては「正法日本建設運動」が宣言された年でもありました。

宗門においては初めての詠讃歌活動による不況運動。これをどのように教義から意味づけ、歌詞によって教義を敷衍していくのか。『梅花流詠讃歌指導必携』の成立とその後の改訂の経緯から、戦後曹洞宗教団の布教活動の一面を照射し、その課題の考察がされました。佐藤俊晃委託研究員より、『梅花流指導必携』成立の経緯。歌詞解説の諸相については、清野宏道専任研究員、佐藤俊晃委託研究員、務臺孝尚委託研究員より、梅花布教の課題として関水博道専任研究員よりそれぞれ発表され、休憩を挟んで、活発な意見交換・質疑応答がされました。

また、3会場に分かれての個人発表行われ、宗学や教学にまつわる分野では、道元禅師や瑩山禅師の思想の参究はもとより、三代相論の諸相—『瑩峩行実集録』所収の記事をめぐって、『洞谷記』における看経についてなど、新しい視点の発表も多々見られました。教化学的分野については、理論的構築を目指した発表が見られる一方で、坐禅会運営の実際に即した研究も多くありました。また、「性的マイノリティ」と宗教者について、子どもの居場所づくりと教化など現代の課題に応じた発表も見られました。

教化研修部門研究部においては、当センター講師・駒澤大学総長池田魯参先生指導の講義に即して、瑩山撰・峨山編と伝える『報恩録』考究と題したりレー発表が研究生3名とともに行なわれた。

二日間にわたる大会では、両日共に宗門内外からの、熱心な聴講者が見られ、盛会裡に幕を閉じました。なお、発表内容は、総合センター学術大会紀要並びに講演録としてまとめられる予定ですので併せてご参照ください。



「こころの問題」研究プロジェクトシンポジウム
只管打坐とマインドフルネスの対話
～一仏両祖が目指した坐禅とは～



梅花流詠讃歌研究プロジェクトシンポジウム
『梅花流指導必携』の変遷
～梅花は曹洞宗の教義にどう位置づけられてきたのか～



熱心な質疑が交わされた

なお、本学術大会はセンター在籍者のみならず、宗門内外から広く発表者を募集しております。今後の宗門発展の礎となる意欲的な発表をお待ちしております。

学術大会開催報告 - プログラム -

〔第1日〕 11月16日（水）

第1部会 <桜の間>

10時～14時30分

<シンポジウム>

「こころの問題」研究プロジェクト

只管打坐とマインドフルネスとの対話

～一仏両祖が目指した坐禅とは～

司会：センター委託研究員 金子宗元

パネリスト

アルボムッレ・スマナサーラ長

（日本テーラワーダ仏教協会長老）

熊野宏昭先生

（早稲田大学人間科学学術院教授・応用脳科学研究所所長）

藤田一照老師（曹洞宗国際センター所長）

15時～16時

<パネル発表>

「終活」を考える－教化と安心をめぐって

1. 「終活」と一地方小都市寺院の現状について

山形県館山寺副住職 山口賢明

2. 「終活ブーム」を通して考える現代教化のありかた

センター専任研究員 関水博道

個人発表（16時20分～17時）

1. 赤松月船老師の生涯と梅花流詠讃歌

岡山県大通寺住職 柴口成浩

2. 戦後の曹洞宗の教化方針について

センター専任研究員 平子泰弘

第2部会 <蘭の間>

個人発表（14時40分～17時）

1. 三代相論の諸相－『瑩我行実集録』所収の記事をめぐって

駒澤大学大学院 横山龍顯

2. 普蔵院住番牒と大洞禅院住山記

センター講師 尾崎正善

3. 『伝光録』の区切り方に関する一考察

センター研究員 加藤龍興

4. 『伝光録』にみえる洞山良价伝の一考察

センター専任研究員 小早川浩大

5. 『坐禅用心記』の定の解釈（四）－動静二相了然不生を中心として

駒澤大学大学院修了 下條 正

6. 『洞谷記』における看経について

センター専任研究員 石原成明

7. 瑩山禅師と浄土思想（二）－曇鸞『浄土論註』との比較

センター専任研究員 宮地清彦

〔第2日〕 11月17日（木）

第1部会 <桜の間>

9時30分～12時

<シンポジウム>

梅花流詠讃歌研究プロジェクト

『梅花流指導必携』の変遷

～梅花は曹洞宗の教義にどう位置づけられてきたのか～

司会：センター専任研究員 関水博道

○『梅花流指導必携』成立の経緯

センター委託研究員 佐藤俊晃

○歌詞解説の諸相

①「三宝御和讃」「正法御和讃」「修証義御和讃」

センター専任研究員 清野宏道

②「『傘松道詠』資料価値の再評価について」「花供養御詠歌（供華）」

センター委託研究員 佐藤俊晃

③「大本山永平寺第一番御詠歌（溪声）」「大本山永平寺第二番御詠歌（溪声替節）」

センター委託研究員 務臺孝尚

○梅花布教の課題

センター専任研究員 関水博道

第1部会 <桜の間>

個人発表（13時～16時20分）

1. 実践仏教について考える（2）－戦後曹洞宗の死者供養言説について

センター研究生 松葉裕全

2. 仏教講座受講者の供養に対する意識調査

センター研修生 田代浩潤

3. ネット動画による教化活動について

センター研究生 中野孝海

4. 坐禅と数息観 ―生理心理学実験を通して
センター研修生 田中仁秀
5. 坐禅体験を共有する場の必要性について
センター研修生 佐田陸道
6. 坐禅会の現状と運営方法について ―運営者の声から見たこと
センター研修生 坂田祐真
7. 一般初心者に対する坐禅指導法の考察 ―具体的な説明方法について
センター副主任研究員 小杉瑞穂
8. 坐禅会・坐禅研修会で活用できる効果的なワーク
ショッップの提案
センター専任研究員 宇野全智
9. 匂い袋づくりを通じた新しい「場作り」の提案センター
専任研究員 久保田永俊
10. 子どもの居場所づくりと教化 ―博物館の居場所
事業を手掛かりに
東京都薬師寺副住職 浅川範之
11. 短大生の学習態度と仏教教育 ―教育に及ぼす作務
の意味
育英短期大学 教授 佐藤達全

第2部会 <蘭の間>

個人発表（13時～15時20分）

1. 道元禅師における天台学受容の諸相
センター専任研究員 清野宏道
2. 本山版『正法眼蔵』の本文成立過程について
駒澤大学大学院 秋津秀彰
3. 『正法眼蔵』『仏道』巻における機関禅について
センター特別研究員 清藤久嗣
4. 道元禅師成仏論と弥勒信仰について
愛知学院大学教養部講師 菅原研州
5. 正信論争考（十三）―博林博士の信について（五）
山口県龍昌寺住職 竹林史博
6. 栄西の入滅地について ―『吾妻鏡』の栄西入滅記
事を踏まえて
花園大学非常勤講師 館 隆志
7. 「弘戒法儀」と「弘戒指南」との比較考 ―黄檗戒壇
の曹洞への影響
愛知学院大学名誉教授 吉田道興

8. 教化研修部門研究部 リレー発表
瑩山撰・峨山編と伝える『報恩録』考究
(1) 研究の回顧と展望
センター研究生 松葉裕全
(2) 依用人物、典籍の検討
センター研究生 中野孝海
(3) 上巻12則「盤山光境俱忘」参究
センター研究生 本多清寛
(4) 抄釈法の課題
駒澤大学総長 池田魯参

第3部会 <芙蓉の間>

個人発表（13時～16時40分）

1. 寺族である、ということについて
女性と仏教・関東ネットワーク 瀬野美佐
2. 「性的マイノリティ」と宗教者について ―教化活
動の視点から
センター研究生 本多清寛
3. 『南国順礼記』を読む
センター専任研究員 古山健一
4. 海外亮天師ゆかりの洞門寺院の今昔
愛知県龍潭寺住職 別府良孝
5. 『金龍山退休禅寺由来記』に見る源翁心昭
駒澤大学仏教経済研究所研究員 上野徳親
6. 「禅苑清規」における維那の職掌
センター研究員 角田隆真
7. 『大日経疏』における初期禅宗思想について
駒澤大学仏教経済研究所研究員 千葉 正
8. 諏訪山吉祥寺史に関する一考察
センター研究員 澤城邦生
9. 徳巖慶隆の寺院整備事業について
愛知学院大学非常勤講師 伊藤秀真
10. 宝永年間種月寺支配下寺院本末帳について
新潟県永泉寺住職 深井一成
11. 建綱と建擲の関係（十）―『建擲記』に登場の義準
岩手県正洞寺住職 熊谷忠興

4 月

- 4 月 5 日 平成 28 年度入所式 を挙行する 檀信徒会館 5 階 研修道場
入所者は以下の通り
宗学研究部門研究員 澤城邦生、角田隆真
教化研修部門研修生 久保田智照、西田稔光、深澤亮道、本田真大
- 4 月 8 日 駒澤大学仏教行事運営協力（降誕会・甘茶供養）を行なう（研修生）
- 4 月 11 日 高齢者福祉施設において実習を行なう（研修生）これは年間を通じて行なわれる
- 4 月 13 日 駒澤大学図書館入庫研修会に、研修生 4 名が参加する
駒澤大学仏教学部寄附講座に講師として、清野宏道専任研究員を派遣する
これは通年の講義を担当する。
- 4 月 14 日 駒澤大学を会場に、駒沢坐禅教室を開催する（研修生）
これは毎月 3 回開催し、8 月を除く 12 月まで行なう

教団付置研究所懇話会「第 15 回年次大会」第 2 回実行委員会が開催され平子泰弘
専任研究員が参加する
- 4 月 22 日 公開研究会「オウンドメディア運用講座」を開催する
- 4 月 28 日 センター会議を開催する

5 月

- 5 月 1 日 平成 28 年度現職・尼僧研修会、寺族研修会において研究員が講義を担当する
これは統一テーマ講義について、各宗務所からの講師派遣申請により派遣される
現職・尼僧研修会「坐禅会を始めるために一宗門の坐禅を広めよう」
寺族研修会「匂い袋を作ろう」
- 5 月 11 日 公開研究会「オウンドメディア運用講座」を開催する

長野県第 1 宗務所布教師会に講師として宇野全智研究員を派遣する
- 5 月 13 日～14 日 『臨済録』国際学会に所長・副所長以下研究員 4 名が参加する（花園大学）
- 5 月 19 日 『kuu:』取材・調査（法政大学）
- 5 月 18 日～19 日 被災地復興支援プロジェクト活動として、宮城県内各所においてビーズブレスレッ
ト・匂い袋作製等の活動を通じた傾聴活動を行なう（布教研プロジェクト）
- 5 月 22 日 教団付置研究所懇話会「第 15 回年次大会」第 2 回実行委員会が開催され研究員
2 名が参加する
- 5 月 23 日 首先住職研修会が開催され、平子泰弘専任研究員・宇野全智専任研究員が講義を担
当する

檀信徒会館を会場に「朝活禅 2016 夏」を開催する
(5～7 月全 6 回 5/23、5/31、6/12、6/20、7/12、7/20)
- 5 月 24 日 センター会議を開催する
- 5 月 25 日 公開研究会「オウンドメディア運用講座」を開催する
- 5 月 26 日～27 日 被災地復興支援プロジェクト活動として、福島県内各所においてビーズブレスレッ
ト・匂い袋作製等の活動を通じた傾聴活動を行なう（布教研プロジェクト）

6月

- 6月3日 公開研究会「オウンドメディア運用講座」を開催する
- 6月4日～6日 法悦 2016 一禅と祈りを開催する（浅草橋ヒューリックホール）
- 6月5日～11日 大本山總持寺伝光会摂心に、研究員・研修生5名が参加する
- 6月15日～16日 『kuu.』取材・調査（熊本県）
- 6月17日 センター会議を開催する
- 6月22日 布教師養成所において宇野全智専任研究員が講義を担当する
- 6月22日～24日 被災地復興支援プロジェクト活動として、宮城県内各所においてビーズブレスレット・匂い袋作製の活動を通した傾聴活動を行なう（布教研プロジェクト）
- 6月28日 東海管区教化センター布教協議会に講師として、小杉瑞穂副主任研究員を派遣する（妙厳寺）

7月

- 7月6日 センター現地研修会を開催する（劇団四季自由劇場）
- 7月8日 曹洞宗宗務庁職員共済会講演会に講師として、平子泰弘専任研究員・宇野全智専任研究員を派遣する（檀信徒会館）
- 7月19日 センター会議を開催する
- 7月20日 大本山永平寺において、平成29年度新入所員募集説明会を開催する
- 7月20日～22日 被災地復興支援プロジェクト活動として、岩手県内各所においてビーズブレスレット・匂い袋作製の活動を通した傾聴活動を行なう（布教研プロジェクト）
- 7月25日 首先住職研修会が開催され、久保田永俊専任研究員・小早川浩大専任研究員が講義を担当する
- 7月26日 曹洞宗青少年書道展運営協力のため研修生を派遣する（メルパルクホール東京）
教団付置研究所懇話会「第15回年次大会」第3回実行委員会が開催され平子泰弘専任研究員が参加する
- 7月27日 大本山總持寺において、平成29年度新入所員募集説明会を開催する

8月

- 8月24日 檀信徒会館を会場に「朝活禅シンプル 2016 秋」を開催する
（8～10月全6回 8/24、9/6、9/12、9/28、10/12、10/18）
- 8月25日 センター会議を開催する
- 8月31日 「ラジオ NIKKEI 禅入門」講師として宇野全智専任研究員を派遣する

9月

- 9月1日 青少年教化指導員研修会講師として小杉瑞穂副主任研究員を派遣する
（メルパルク仙台）
- 9月2日 自死遺族対象の法要・茶話会「祈りの集い」（第16回）を開催する
（檀信徒会館5階研修道場）

9 月

- 9 月 3 日～4 日 日本印度学仏教学会 第 67 回学術大会に所長他研究員 3 名が参加する
(山形県秀林寺)
- 9 月 5 日～6 日 「自死者供養」に関する講師として久保田永俊専任研究員を派遣する(山形県秀林寺)
- 9 月 6 日 「ラジオ NIKKEI 禅入門」講師として宇野全智専任研究員を派遣する
- 9 月 8 日～9 日 被災地復興支援プロジェクト活動として、福島県内各所においてビーズブレスレット・匂い袋作製の活動を通した傾聴活動を行なう(布教研プロジェクト)
- 9 月 14 日～15 日 被災地復興支援プロジェクト活動として、宮城県内各所においてビーズブレスレット・匂い袋作製の活動を通した傾聴活動を行なう(布教研プロジェクト)
- 9 月 16 日 センター会議を開催する
- 9 月 29 日 教団付置研究所懇話会「第 15 回年次大会」が開催され研究員 9 名が参加する
(中山身語正宗 大本山瀧光徳寺)

10 月

- 10 月 3 日 「禅をきく会」運営協力のため、研修生を派遣する(メルパルクホール東京)
- 10 月 6 日 平成 29 年度新入所員選考会を開催する
- 10 月 8 日 東京都武蔵野市観音院を会場に、駒沢坐禅教室 1 日坐禅会を開催する(研修生)
- 10 月 12 日 第 1 回運営委員会を開催する
センター会議を開催する
- 10 月 12 日～13 日 「自死者供養」に関する講師として久保田永俊専任研究員を派遣する(山形県秀林寺)
- 10 月 12 日～14 日 被災地復興支援プロジェクト活動として、宮城県内各所においてビーズブレスレット・匂い袋作製の活動を通した傾聴活動を行なう(布教研プロジェクト)
- 10 月 14 日 『kuu.』取材・調査(武蔵野大学)
第 1 回過疎問題連絡懇談会が開催され、平子泰弘専任研究員が参加する
(真言宗智山派別院真福寺)
- 10 月 21 日 『kuu.』取材・調査(ソーシャルメディア研究所)
- 10 月 22 日 「ラジオ NIKKEI 禅入門」講師として宇野全智専任研究員を派遣する
- 10 月 26 日 布教師養成所において宇野全智専任研究員が講義を担当する
- 10 月 31 日 首先住職研修会が開催され、宮地清彦専任研究員が講義を担当する
管区教化センター後期連絡協議会講師として、久保田永俊専任研究員を派遣する
(檀信徒会館)

11 月

- 11 月 2 日 檀信徒会館を会場に「朝活禅 2016 冬」を開催する
(11～1 月全 6 回 11/6、11/15、12/6、12/19、1/11、1/17)
- 11 月 4 日 教団付置研究所懇話会「自死問題研究部会」が開催され、宇野全智専任研究員が参加する

11月

- 11月10日 第2回運営委員会を開催する
- 11月16日～17日 第18回学術大会を開催する
- 11月21日 『kuu.』取材・調査（WMファクトリー）
- 11月26日 第87回禅研究会学術大会が開催され、所長以下研究員3名が参加する（花園大学栽松館）
- 11月29日 特派布教師協議会が開催され、宇野全智専任研究員が講義を担当する
- 11月30日～12月2日 被災地復興支援プロジェクト活動として、岩手県内各所においてビーズブレスレット・匂い袋作製等の活動を通じた傾聴活動を行なう（布教研プロジェクト）

12月

- 12月1日・6日 曹洞宗宗務庁職員共済会臘八撮心が修行され、小杉瑞穂副主任研究員・宇野全智専任研究員2名が坐禅指導を担当する
- 12月2日 臘八撮心会が修行され、清野宏道専任研究員が坐禅指導を担当する（駒澤大学）
- 12月8日 駒澤大学仏教行事運営協力（成道会）を行なう（研修生）
- 12月7日 教団付置研究所懇話会「生命倫理研究部会」が開催され副所長以下研究員7名が参加する（浄土宗総合研究所）
- 12月9日 第26回愛宕薬師フォーラムが開催され、研究員2名が参加する
- 12月11日～12日 臨済宗妙心寺開山忌法要が修行され、副所長以下研究員3名が随喜する（妙心寺）
- 12月14日 平成29年度新入所員選考会（第2次）を開催する
- 12月15日 十日町自殺予防研修会が開催され、宇野全智専任研究員を講師に派遣する
- 12月20日 第3回運営委員会を開催する
- 12月21日 『kuu.』取材・調査（神奈川県東泉寺）
- 12月23日 センター会議を開催する
- 12月26日～27日 第63回コルモス研究会が開催され、小杉瑞穂副主任研究員が参加する（ANA クラウンプラザホテル京都）

2017

1月

- 1月18日～20日 被災地復興支援プロジェクト活動として、宮城県内各所においてビーズブレスレット・キャンドル作製等の活動を通じた傾聴活動を行なう（布教研プロジェクト）
- 1月21日 「初期禅宗史研究の現在－柳田聖山」を越えてが開催され、研究員4名が参加する（東洋大学）
- 1月23日 センター会議を開催する
- 1月26日 駒澤大学仏教学会第2回定例研究会が開催され、研究員5名が参加する（駒澤大学）
- 1月29日 龍谷大学世界仏教文化研究センター開設記念事業特別講演会が開催され、研究員1名が参加する（龍谷大学深草学舎 顕真館）

2 月

- 1 月 30 日 首先住職研修会が開催され、関水博道専任研究員・平子泰弘専任研究員 2 名が講義を担当する
- 2 月 2 日 檀信徒会館を会場に「朝活禅シンプル春」を開催する
(2～3 月全 6 回 2/2、2/13、3/2、3/14、3/22、3/31)
- 2 月 7 日 公開研究会「宗教心理学概論」を開催する
- 2 月 15 日 「ラジオ NIKKEI 禅入門」講師として宇野全智専任研究員を派遣する
- 2 月 16 日～17 日 被災地復興支援プロジェクト活動として、福島県内各所においてビーズプレスレット・キャンドル作製の活動を通じた傾聴活動を行なう(布教研プロジェクト)
- 2 月 18 日 センター会議を開催する
- 2 月 21 日～27 日 教化研修部門伝道実習として、ふくい南青山 291 を会場に、東京禅僧茶房 2016 を開催する(研修生)

3 月

- 3 月 2 日 平成 29 年度新入所員選考会(第 3 次)を開催する
- 3 月 4 日 自死遺族対象の法要・茶話会「祈りの集い」(第 17 回)を開催する
(檀信徒会館 5 階研修道場)
- 3 月 8 日 第 4 回運営委員会を開催する
- 3 月 9 日 公開研究会「宗教心理学概論」を開催する
- 3 月 10 日～12 日 被災地復興支援プロジェクト活動として、福島県内各所においてビーズプレスレット・匂い袋作製の活動を通じた傾聴活動を行なう(布教研プロジェクト)
- 3 月 13 日 日本宗教連盟第 5 回宗教文化セミナーが開催され、宮地清彦専任研究員が参加する
(聖路加国際病院トイスラーホール)
- 3 月 15 日 平成 28 年度修了式を挙げる 檀信徒会館 5 階 研修道場
修了者は以下の通り
宗学研究部門研究員 加藤龍興
教化研修部門研究生 本多清寛
教化研修部門研修生 坂田祐真 佐田陸道 田代浩潤 田中仁秀
- 3 月 15 日 センター会議を開催する
- 3 月 22 日 第 5 回運営委員会を開催する
- 3 月 27 日 第 180 回駒沢宗教学研究会が開催され、研究員 6 名が参加する(駒澤大学)
- 3 月 27 日～28 日 第 60 回曹洞宗スカウト研修会が開催され、小杉瑞穂副主任研究員・研究生 1 名が講義を担当する(檀信徒会館)
- 3 月 29 日 首先住職研修会が開催され、石原成明専任研究員・古川健一専任研究員 2 名が講義を担当する

総合研究センターによる主な出版物

研究成果及び主催する学術大会の報告として、出版物を発行しております。尚、主なセンターからの刊行物は、曹洞宗公式ホームページ「曹洞禅ネット」において e-book でご覧いただけますのでご活用ください。

○研究成果として定期刊行するもの

『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』

『宗学研究紀要』

○活動報告として定期刊行するもの

「曹洞宗総合研究センター報」

「曹洞宗総合研究センター公開講演会 講演録」



○教化資料等

宗侶と寺族のための情報誌『kuu:』

リーフレット『自死に向き合う～いま、私にできること～』

リーフレット『相談活動のはじめ方』

センター刊行物を頒布いたします

当センターの研究成果刊行書籍を頒布いたしますので、ご希望の方はセンターまでお問い合わせください。

近年刊行で残部のある書籍

『葬送儀礼と民俗』

『曹洞宗近代教団史』

『曹洞宗関係文献目録Ⅲ』

『宗学研究紀要』（27号、28・29号）

『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』（15回・16回・17回）

【問い合わせ・申し込み】

曹洞宗総合研究センター

〒105-8544 東京都港区芝 2-5-2 曹洞宗宗務庁内

TEL 03-3454-7170（代） FAX 03-3454-7171

在籍者紹介



副所長
教化研修部門
主任研究員
し べ けんいち
志部 憲一

〔研究課題〕 江戸期宗学

現在、個人的に『天桂伝尊の研究』及び『天桂伝尊全集』刊行を念頭に、色々準備している。また一昨年より、宗務庁出版部「宗典編纂委員会」のメンバーとして『正法眼蔵』編纂作業に従事している。若い人達と一緒に作業をさせているが、充実した日々感謝している。

教化研修部門は様々な講座や所外研修、伝道実習や東京禅僧茶房等の研修も充実している。一方、宗学研究部門は、新たに2名入所し研究体制が整い、岩手県正法寺への現地研修・資料調査等、徐々に研究環境も充実しつつある。両部門とも今後の所員の適正な育成に期待したい。



教化研修部門
副主任研究員
こすぎ みずほ
小杉 瑞穂

〔研究課題〕 坐禅普及の方法論研究 ―初心者への具体的な説明方法について―

ストレスフルで緊張感あふれる固まった現代人のカラダ。そこをゆるめながら坐禅のやり方を伝えていくことで、重心も安定し、落ち着きやすくなる。具体的な方法として「一生懸命やらない」「適当にやる」「骨にまかせる」「ゆるむためにゆるす」「ゆるむことで自分がゆるされる」など、脱力に導くキーワードを使っていく。実際に多様な坐禅の場でこれを活用し、「幸せでした」「安らぎました」「楽しかった」という言葉をいただいております、特に初心者への指導方法として有効に作用することがわかった。



専任研究員
みやじ せいげん
宮地 清彦

〔研究課題〕 中国仏教思想史（日本禅典籍における天台・華嚴・浄土典籍の引用について）

元来、天台・華嚴教学を研究してきた身といたしましては、それらから影響を受けている日本曹洞禅思想を、引用典籍の面から従前以上に解明したいと考えております。ここ数年は、そこに中国禅思想とも関連の深い浄土思想をまじえております。1300年代の曹洞宗及び他宗派の祖師方の浄土思想への関わり具合を比較し、多角的に研究活動を進めて参りたい所存です。また、プロジェクトで進めております「宗教と法律」についての研究は、多くの方がたに御理解いただけるような内容のものにしたいと考え、関係各位の御示唆を頂戴しながら鋭意努力をしております。



専任研究員
ひらこ たいこう
平子 泰弘

〔研究課題〕 死や葬送をめぐる現代的研究、データの集計・分析による寺院をめぐる問題の研究

葬儀後の種々の追善供養の研究において、多くの資料を集めるなかで、死後の存在や世界観など教理学だけでは説明しきれない課題をいただいております。プロジェクト住職学においては、自身の至らなさも含めて、僧侶として身につけておくべきことの多さに改めて考えさせられる一年でした。宗勢総合調査報告書作成に携わり、寺院の直面する問題や今後への多くの不安を示し得たと感じますが、こうした課題に一つずつ成果を示していくことが次の世代につながるものと確信し、研究を続けていきたいと考えております。



専任研究員
うの ぜんち
宇野 全智

〔研究課題〕

現代社会における寺院の役割について

本年度、現職研修会では「坐禅会をはじめのために一宗門の坐禅を広めよう」をテーマにした講義を担当し、初心者向けの坐禅指導の方法について、朝活禅や禅社員研修の運営で培ったノウハウなどを交えながらお話しさせていただきました。

また寺族研修会では「匂い袋を作ろう」と題した講義を担当し、被災地支援活動で実施したワークショップを参加者の皆さんに体験して頂きました。気軽に集える場づくりの大切さについて、参加者の皆さんと一緒に再確認することができました。



専任研究員
ふるやま けんいち
古山 健一

〔研究課題〕

曹洞宗学（近世・近代の宗門）、パリー学（原始仏教研究、東南アジアの上座部仏教研究）

本年度もタイの各所を訪れ、地域信仰誌研究のための実地調査と資史料収集をおこないました。2016年3月にタイ・チェンマイ県のチェンダーオ郡とウィエンヘーン郡、ナーン県ムアンナーン郡、同年7月にアユタヤ遺跡、同年12月に同メーホンソン県のソップムーイ郡、メーサリエン郡、クンユワム郡、ムアンメーホンソーン郡、パーイ郡、2017年3月にロップリー及びナコンパトムを訪れました。

また、編集委員・執筆者として携わってきたパリー学仏教文化学会編『上座仏教事典』（めこん）が10月25日に刊行されました。



専任研究員
くぼた えいしゅん
久保田 永俊

〔研究課題〕

現代社会における僧侶の役割と、その活動と実際について

「祈りの集い—自死者供養の会—」では、ご遺族に向き合い、抱えている苦悩を直接お聴きしております。また東日本大震災で被災された方がたを定期的に訪問し、傾聴活動を行っております。その訪問先は高齢者福祉施設や障がい者支援施設、保育園、放課後児童クラブ等でした。こうした日頃の諸活動を通じて現実の問題を直視し、僧侶ができることは何かを検討しております。僧侶が社会の苦悩に、どう関われるのか。社会全体の意識が変りつつあるなかで、世代を越えて一人ひとりに届く布教方法や、その具体的な教化活動も視野に入れて研究しています。



専任研究員
せきみず ひろふみ
関水 博道

〔研究課題〕

現代教化理論（価値観の多様化に対応しうる教化論の構築）

ここ数年、現代の人びとの宗教にまつわる行動を分析し、禅・仏教の価値観をいかに伝えるか、その理論の構築に取り組んでいます。昨年度は、「終活」を切り口として研究を行いました。最近、「終活」（自らの死を視野に入れた種々の活動）がブームとなる一方で、伝統仏教の葬儀・供養を避ける傾向もあります。教化者としては、葬祭を通して、禅・仏教の生死観を伝え、生き方の礎としてもらうことが求められると考えております。そして、この問題意識を発端として学術大会においては、「終活」を考える—教化と安心をめぐる、というパネル発表を企画し、考察を深めました。

在籍者紹介



専任研究員

こばやかわ こうだい
小早川 浩大

〔研究課題〕

曹洞宗学（中国禅宗との関わりを中心に）

主として宗門における中国禅宗の受容と展開を研究課題とし、日々研鑽を重ねています。宗典には様々な灯史や語録が用いられていますが、これら禅籍がどのように取りあげられているかを確認することにより、宗典に対する理解を一層深めることができると考えます。そこで、本年度は『伝光録』における洞山良价伝について、その構成と成立を確認するとともに、亡き人に対する供養との観点から検討をいたしました。今後も継続して研究してまいります。また、現在担当している教化研修部門の「禅宗史」の講義では、宗門の視点から中国禅宗史を辿っていきたいと思います。



専任研究員

いしはら じょうみょう
石原 成明

〔研究課題〕

曹洞宗学（両祖の思想的影響について）

これまで道元禅師の思想研究を進めてまいりましたが、本年度は少し視点を変え、道元禅師が指示された作法が、以降どの様に受用されているかを探るべく、瑩山禅師の著作とされる『洞谷記』に記された作法との比較考察を行いました。『洞谷記』には瑩山禅師の伝記のみならず、法要作法に関する内容も記されておりますが、これまであまり着目されてきませんでした。しかし、他の清規類にも記載されない作法も見出されることから、これらを考察することで、曹洞宗教団の法要の様相・また変遷を解明することに繋がると考えます。



専任研究員

せいの こうどう
清野 宏道

〔研究課題〕

曹洞宗学（仏教思想史より見る道元禅師の思想）

道元禅師の思想研究が学術的に始められ、既に半世紀以上の月日が経過しています。今日まで多くの研究者が数多の論攷を提示し、その実態を解明してきました。しかし、未だ仏教思想という潮流から道元禅師の思想を把握する研究は進展していないように思われます。従来、道元禅師は洞門という体系の範疇において思考されることが殆どでしたが、禅宗という概念をも超克しようとする向上的な禅師の姿勢を鑑みる時、より広範な視座から本義を再考する必要があるといえます。伝統的な仏教思想に照らして道元禅師の法義を考究することは、新たな禅師の理解に繋がると考え、日々精進させて頂いております。



宗学研究部門
研究員（5年度）

かとう りゅうこう
加藤 龍興

〔研究課題〕

曹洞宗学（瑩山禅師の思想および著作の研究）

太祖瑩山紹瑾禅師の思想解明の一端として禅師の著述の文献学的研究に注力しています。本年度の曹洞宗総合研究センターの学術大会では「『伝光録』の区切り方に関する一考察」と題した口頭発表を行い、宗学研究部門発行の『宗学研究紀要』第30号では「瑩山禅師撰『伝光録』の構成法」再考」と題した論文発表を行いました。何れの論攷も論題が示す通り『伝光録』の構成法に焦点を当て考察を試みたものです。瑩山禅師の著述の解釈に関しては研究者間で見解の相違が多分に認められるところですが、今後も禅師の著述を正確に読み進め研究を進展させていきたいと考えています。



宗学研究部門
研究員（1年度）
さわき ほうしょう
澤城 邦生

〔研究課題〕

曹洞宗学（中世後期から近世初頭にかけての曹洞宗教団史）

研究領域は、宗門が地方展開していったといわれる中世後期から近世初頭にかけての曹洞宗教団史です。先学の知見を踏まえつつ、さらに広範な史料を用いて、当該期の教団史を検討していくつもりです。本年度は、諏訪山吉祥寺の開創期に関する研究や、『上井覚兼日記』を対象とした研究を行いました。また宗務庁やセンターの種々のプロジェクトに関わる機会を頂いており、個人研究と並行して、それらの責務も果たしていきたいと思っています。



宗学研究部門
研究員（1年度）
つのだ りゅうしん
角田 隆真

〔研究課題〕

曹洞宗学（中国成立の諸清規と『瑩山清規』の関係について）

『瑩山清規』は、太祖瑩山紹謹禅師が編集された清規であり、その後の宗門の清規に多大なる影響を及ぼした、現在の宗門における行持等の基礎を規定したと言わなければならない清規です。その『瑩山清規』については、近年、禅林寺より未出の写本が発見され、新たな研究の余地ができました。この禅林寺本『瑩山清規』と、現存する最古の清規である『禅苑清規』以降の中国成立の諸清規とを比較することにより、清規という側面において、瑩山禅師の中国禅宗に対する受容と変容の軌跡を解明することを目標としております。



教化研修部門
研究生（3年度）
ほんだ しょうかん
本多 清寛

〔研究課題〕

性的少数者と僧侶の関わり方

今まで、性的少数者にまつわる「性的指向と性自認」（SOGI）の問題は目に見えないものとして扱われ、時には嘲笑の対象となってきました。しかし、現在は国会で審議されるような社会的課題として扱われ始めています。

こうした現状を踏まえ、僧侶の立場で何が出来るのかを模索する研究を行っています。本年度は、当事者の方への聞き取り調査、歴史上における性的マイノリティについて調査を行いました。



教化研修部門
研究生（2年度）
なかの こうかい
中野 孝海

〔研究課題〕

ネット動画による教化活動について

昨年度は宗門内におけるネット環境を活用した教化活動についての調査を行うと共に、一つのモデルケースとしてイス坐禅の指導に関する動画を作成し、その反応や意見を集め、ネット環境を活用した教化活動の有効性について調査・研究を行いました。

どのようにすればより楽しく、よりわかりやすく仏教を伝えることができるのか。仏教や宗門の教えに興味を持つきっかけとなれるような教化活動を目指し、その手法に関する研究を行っています。

在籍者紹介



教化研修部門
研究生（2年度）

まつば ゆうぜん
松葉 裕全

〔研究課題〕

実践仏教について考える

葬儀等の儀礼は仏教の教えの中にはなく、仏教的ではないとされる場合がある。こうした状況を「分離」しているとするならば、仏教の教えと現場の活動が「分離」しているということになる。実際の寺院活動は、葬儀などの法要によって保たれている。そのため「分離」している状況を少しでも近づけることを考える必要がある。本研究はこの「分離」を近づけることが目的である。



教化研修部門
研究生（3年度）

さかた ゆうしん
坂田 祐真

〔研究課題〕

坐禅会の運営方法について

「将来自分は坐禅会を開きたい。しかしどのように運営したら良いだろうか」という疑問が、私の研究を進めるきっかけでした。

本研究では、都内宗門寺院で行われている坐禅会を調査しています。その調査では、内容や手法を把握するとともに、坐禅会を運営されている方にもお話を伺っています。得られた調査結果を基に比較等の考察を進め、より有意義な坐禅会活動ができるような運営方法の可能性を探っていきたいと思っています。



教化研修部門
研究生（3年度）

さだ りくどう
佐田 陸道

〔研究課題〕

坐禅体験を共有する場の必要性について

曹洞宗宗勢総合調査では、坐禅会参加の減少が報告されています。坐禅を宗旨の根幹とする宗門において、坐禅会への参加者をいかに定着させていくかということは、布教教化を進める上で重要な課題の一つとして挙げられます。

本研究では首都圏で開催されている坐禅会へアンケート調査を行い、坐禅会参加者の意識を調査、浮かび上がった参禅者の意識傾向から現行の坐禅会の課題を考察します。特に坐禅体験の感想や疑問を共有する場への要請と、現状を中心に取り上げ、参加者がより充実する坐禅体験の場作りを模索していきます。



教化研修部門
研究生（3年度）

たしろ こうじゅん
田代 浩潤

〔研究課題〕

仏教講座受講者の供養に対する意識調査

坐禅会や仏教講座には勉強熱心な方がたが自らの意思で集まります。私たち研修生の運営している坐禅会にも、坐相や自宅での坐禅の仕方、などを話題にしている人がおり、私もそんな会話に何度か立ち会ったことがありました。しかし、多くの人にとって仏教に触れる主なきっかけとなっているであろう先祖供養を、彼らが話題にしている場面に出くわしたことは殆どありませんでした。そこで、私は熱心に仏教を学ぶ人たちの年回供養に対する意識を調査していきます。



教化研修部門
研修生（3年度）
たなか じんしゅう
田中 仁秀

〔研究課題〕

仏教の行法に関する心理学的研究

私は仏教の行法、特に坐禅と数息観に関して、心理学的手法を用いた科学的な見地から、その特徴や有効性を検討しております。

今年度の学術大会では、「坐禅と数息観」と題して、宗門僧侶の方を対象とした生理心理学実験の結果を発表しました。

今後も継続的な研究を通して、より精緻なデータを集め、その魅力を伝えていきたいと考えています。



教化研修部門
研修生（2年度）
いとう しょうぼう
伊藤 正法

〔研究課題〕

典座教訓・赴粥飯法の研究

本研究は、高祖大師道元がお示しになられた典籍「典座教訓」・「赴粥飯法」を読み解き、脈々と受け継がれる食に対する意識や意義について確認致します。併せて、現代社会において私たち現代人は何気なく食事をしていますが、その陰で食料の無駄「食料ロス」という問題も起きています。以前よりは減少傾向にはありますが、現状毎日そのロスは排出され続けています。そのことを踏まえ、一般の方々に対して高祖大師から受け継がれた食に対する考え方を分かり易く伝えると共に、その伝える術を模索しています。



教化研修部門
研修生（2年度）
えさし りょうぜん
江刺 亮専

〔研究課題〕

禅とマインドフルネスの考察

ここ数年「マインドフルネス」という言葉が広く認識されてきているように感じる。その中で私たちが行う「坐禅」とマインドフルネスにおける「瞑想」との間にどのような違いや共通点が存在するのか。心の安らぎを求める人々が多くなっている現代だからこそ、この両者の違いを把握し、生かし合える道を模索していくべきなのではないだろうか。そのような思いから、今年度はマインドフルネスに関する見識を深めるとともに、「心を調える」ということについて考察していきたい。



教化研修部門
研修生（2年度）
さしろう はくし
佐粧 博史

〔研究課題〕

有料仏教イベントの考察

仏教イベントと一概に言っても様々イベントがあります。それを今回は有料か無料かという区分で振り分けたいと思います。関東圏の仏教イベントの主催者に取材とアンケートを実施して、その差異についての考察を行います。取材は、有料にした理由と、集客率、目的は布教なのか、利益なのかなど。有料イベントとして行われているものが、寺院経営の新たな経営基盤になり得るのか、経営上の割合など詳しく知ることができれば、曹洞宗としての布教と経営の足がかりになるものであると考えています。

在籍者紹介



教化研修部門
研修生（1年度）

くばた ちしろう
久保田 智照

〔研究課題〕

社会環境の変化に曹洞宗はどう答えるか ―寺院経営と布教教化の展望―

現在のわが国社会は非常に流動的であると見ることができます。少子高齢化、都市化・過疎化など、寺院を取り巻く社会環境の変化に伴い、寺院の経営状態や社会との関係性、そして僧侶の活動形態も変化しつつあります。社会環境が変化し、さらに将来多くの寺院が経営面で苦境に立たされると予測される中、曹洞宗に求められる役割とは一体何でしょうか。布教教化を損なうことなく、その上でいかに寺院を維持していくか、広い視野を持って探っていきたいと考えています。



教化研修部門
研修生（1年度）

にしだ しんこう
西田 稔光

〔研究課題〕

今後の布教教化の在り方について

曹洞宗の布教教化は、時代の流れに沿って様々に変容してきた。特に戦前～戦後にかけては国政に迎合してきた歴史があります。2016年、安全保障関連法が施行された現代社会において、布教教化の在り方を再認識しなければならないのではないのでしょうか。戦争を知らない世代がこれからの社会で必要になる布教教化の在り方について模索していききたいと思います。



教化研修部門
研修生（1年度）

ふかざわ りょうどう
深澤 亮道

〔研究課題〕

青年期における自死と僧侶の役割

日本は経済大国と呼ばれながら、貧困や精神的に追い詰められての自殺（自死）が大きな問題となっています。

仏教は本来生きるための智慧だけでなく、人の悲しみに寄り添うことの大切さを説いています。この思想を貧困と自死の問題を考える時の手がかりとなり、またそういう状況における僧侶の役割とは何であろうか。僧侶だからこそできることは何であろうか考えていききたいと思います。



教化研修部門
研修生（1年度）

ほんだ しんだい
本田 真大

〔研究課題〕

青少年教化における曹洞宗宗侶の課題と可能性

教化研修部門青少年コースでは、研修の一環として毎月駒沢高校を訪問し、坐禅指導や宗教の授業などを行っています。その中で私は、仏教の教えや坐禅を通した青少年との関わり方の手段や手法について模索しています。そこで、実際に駒沢高校の生徒にアンケート調査を実施し、青少年に対する布教教化に役立てるような新たな研究を考えています。

平成 28 年度 総合研究センター構成一覧

所長	大谷哲夫	副所長	志部憲一	事務局長	高橋直人
主任研究員	大谷哲夫（現代教学・宗学研究部門） 志部憲一（教化研修部門）				
副主任研究員	小杉瑞穂（教化研修部門）				
専任研究員	宮地清彦、平子泰弘、宇野全智、古山健一、久保田永俊、関水博道、 小早川浩大、石原成明、清野宏道				
事務局員	赤間泰然 伊藤美智子				
委託研究員	秋 央文、勝俣暎史、前田宥全、中野尚之、館盛寛行、長岡俊成、中野禅隆、 西山修浩、横山俊顕、永井政之、佐藤俊晃、晴山俊英、金子宗元、君島真実、 上月泰龍				
宗学研究部門研究員	5 年度 加藤龍興 1 年度 澤城邦生、角田隆真 特別研究員 清藤久嗣、相澤秀生、丸山劫外				
教化研修部門研究生	3 年度 本多清寛 2 年度 中野孝海、松葉裕全				
教化研修部門研修生	3 年度 坂田祐真、佐田陸道、田代浩潤、田中仁秀 2 年度 伊藤正法、江刺亮専、佐粧博史 1 年度 久保田智照、西田稔光、深澤亮道、本田真大				
講 師	飯石崇博、石井修道、伊藤良久、岩永正晴、大菅俊幸、尾崎正善、草柳隆三、 来馬正行、黒柳博仁、高屋継仁、讃岐真佐子、篠原鋭一、島 蘭 進、笹川敏幸、 圭室文雄、東條光雅、西田正法、服部元良、深澤信善、山本元隆、渡邊雪雄 (50 音順)				

曹洞宗総合研究センター所員募集について

宗学研究部門研究員、教化研修部門研究生及び研修生の募集を下記要項により行っています。出願締切、選考日等、詳細につきましては、総合研究センターにお問い合わせください。

①宗学研究部門 研究員

応募資格

本本宗の教師養成機関である大学の大学院博士課程を修了した者（同課程を修了するために必要な単位を修得のうえ退学した者を含む）、教化研修部門研究部を修了した者、またはこれと同等以上の学識を有する者で、本宗の僧籍を有する者。

研究期間 5年（規程により研究費を支給）

募集人員 若干名

選考方法 業績審査および面接

②教化研修部門 研究生

応募資格

研修部修了者で在籍中優秀な成績をおさめ、将来教化に専念することができる者、または本宗の教師でこれと同等以上の資格を有する者。

研修期間 3年（規程により研修費を支給）

募集人員 若干名

選考方法 面接および小論文

③教化研修部門 研修生

応募資格

大学を卒業（見込みを含む）し、曹洞宗の僧籍を有する満35歳未満の者。

研修期間 3年（規程により研修費を支給）

募集課程 一般教化課程、青少年教化課程

募集人員 各課程とも若干名

選考方法 筆記試験および面接

○筆記試験出題範囲

『曹洞宗宗憲』・『仏教概論』『釈尊伝』『道元禅師伝』『瑩山禅師伝』

（宗務庁出版部にて入手可 ※『曹洞宗宗憲』は『曹洞宗宗制』に含まれています）

『仏教の基礎知識』『仏教要語の基礎知識』 水野弘元 春秋社

【問い合わせ・申し込み】

曹洞宗総合研究センター

〒105-8544 東京都港区芝2-5-2 曹洞宗宗務庁内

TEL 03-3454-7170（代） FAX 03-3454-7171

Soto Institute for Buddhist Studies

2016-2017

Contents

■ 研究活動報告 ― 研究機関として ―

- 04 「こころの問題」研究プロジェクト
- 05 「宗教と法律」研究プロジェクト
- 06 「宗典データベース」プロジェクト
- 07 「梅花流詠讃歌」研究プロジェクト
- 08 布教・教化実践モデル開発研究プロジェクト
- 10 プロジェクト「住職学」
- 11 「追善供養」研究プロジェクト
- 12 曹洞宗の「教義」に関する研究プロジェクト

■ 研修活動報告 ― 人材養成機関として ―

- 13 宗学研究部門
- 16 教化研修部門

■ 第18回学術大会開催報告

- 20 大会・シンポジウム概要
- 22 大会プログラム

■ 平成28年度事業報告

- 24 総合研究センター事業報告（2016年4月～2017年3月）

■ 在籍者紹介

- 30 平成28年度 在籍者紹介
- 37 平成28年度 総合研究センター構成一覧

※本誌の内容はインターネット上でも閲覧することが出来ます。
<http://www.sotozen-net.or.jp/soken/>



曹洞宗総合研究センター

〒105-8544 東京都港区芝 2-5-2 曹洞宗宗務庁内
TEL: 03-3454-7170 (代) FAX: 03-3454-7171
<http://www.sotozen-net.or.jp/soken/>

